終戦80年

戦跡記念碑をたどる-9

ラブラドル砲台

LABRADOR BATTERY

2026年6月3日　史蹟史料部

戦跡記念碑 NO.10　ラブラドル砲台 LABRADOR BATTERY

設置場所 : Labrador Park, Singapore 119187

第 9 回目は、ラブラドル・パークにある戦跡記念碑をご紹介します。

1878 年、英国はケッペル港西口の防衛拠点として、この丘陵地にパシル・パンジャン砦を建設しました。この砦は、19 世紀に英国がシンガポールの海上防衛網を構築するために整備した 11 の沿岸砦の一つでした。

シンガポールの戦いでは、ラブラドル砲台（現在のラブラドル・パーク内）に、102 ポンド（約 46 キログラム）の砲弾を最大 16 キロ先まで発射できる重量 37 トンの巨砲 2 門が据えられていました。この砲は本来、海上から接近する艦船を迎撃するために設置されたものでしたが、360 度旋回が可能であったため、マレー半島から南下してきた日本軍に対しても砲火を浴びせました。

ラブラドル砲台は、フェイバー射撃司令部（Fire Command）の管轄下にあり、6 インチ砲 2 門を備えていました。ここには第 7 海岸砲兵連隊の砲手が配置されており、部隊は多民族によって構成されていました。地元のマレー人兵士がサーチライトの操作を担当し、インド人兵士が砲の運用に当たり、イギリス人の正規砲兵が下士官（NCO）および将校を務めていました。インド人兵士とイギリス人兵士は、王立砲兵隊香港・シンガポール大隊（Hong Kong and Singapore Royal Artillery：HKSRA）に所属していました。

ブラカン・マティ島（現在のセントーサ島）のシロソ砲台とともに、1942 年 2 月 12 日には西進中の日本軍弾薬輸送船を砲撃し、これを撃沈しました。

翌 13 日には、ウェストコースト・ロードおよびジュロン川方面から進軍してきた日本軍に対して砲撃を行い、パシル・パンジャン・リッジにおけるマレー連隊の戦いを支援しました。

しかし、日本軍のシンガポール侵攻直前に破壊されたセレター軍港付近の石油貯蔵施設から立ち上る黒煙と、激しいスコールによって視界は著しく悪化していました。その中を重油で顔や軍服を黒く汚した日本兵が接近したため、守備側のマレー連隊は混乱に陥り、一部の陣地では後退を余儀なくされました。

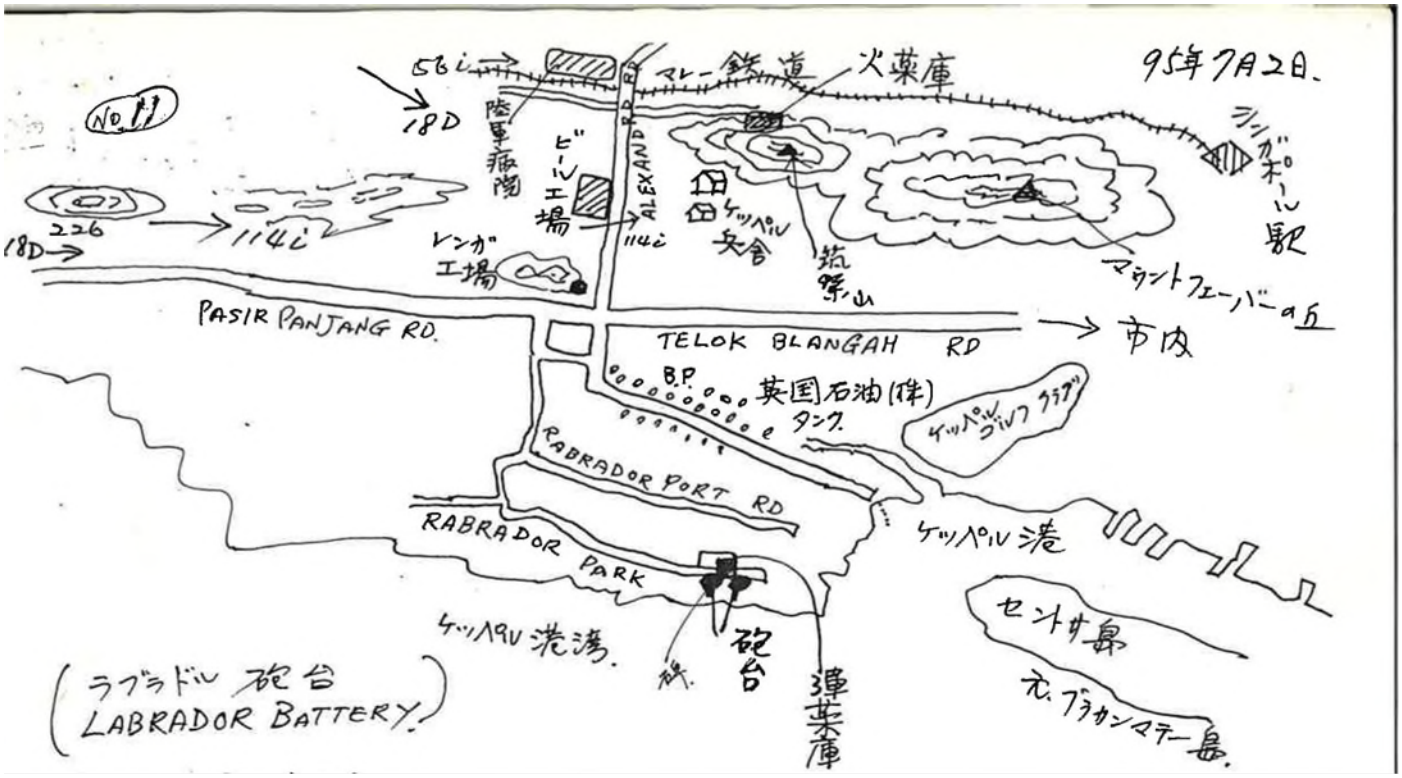
砲台はその後、日本軍による利用を防ぐため、英軍の手によって破壊されました。海岸沿いには現在もトーチカ（防御陣地）の跡が残されており、当時の戦いの様子を今に伝えています。

ラブラドル・ネイチャー・リザーブには、砲台跡のほかにも砦や軍事施設の遺構が数多く残されています。園内にはシンガポール・ヘリテージボードによる案内板が設置されており、自然散策を楽しみながら戦争遺跡を見学することができます。

ラブラドル・パーク駅から歩いて行ける場所にあり、週末の朝は多くの地元の人々の散歩やランニングコースになっています。

丘をくりぬいて作られた英軍のトンネルも残されており、扉が開いている時であれば中に入ることができます。1886 年に建設され、弾薬庫として使われました。丘の上の砲座に直接給弾するシステムが設けられていたそうです。

シンガポール島内に残る戦争遺跡の中でも、ラブラドル砲台周辺は当時の軍事施設や戦跡が最も良好な状態で保存されている場所の一つです。市街地からのアクセスも良く、シンガポールの戦時史を学ぶことができる貴重な史跡として、ぜひ一度訪れてみてください。



佐々木賢一さん手書きの地図

佐々木賢一氏のメモや、篠崎護氏が著した『シンガポール占領秘録』によると、現在はマーライオンやセントーサ島へ渡るケーブルカーの乗り場があることで知られるマウント・フェーバーの丘は、日本軍第 18 師団（菊兵団）の久留米部隊が駐留していたことから、占領期には九州の筑紫山地になぞらえて「筑紫山」と呼ばれていました。

当時、この丘には第 18 師団長・牟田口廉也中将の筆による「菊兵団奮戦の地」と記された木柱が建てられ、その両脇には将校と兵士の像が設置されていました。

また、マウント・フェーバーの斜面には多数の木製の墓標が立ち並んでいましたが、終戦後、それらの墓標は撤去されました。一方で、二基の石碑については、その後も急斜面の藪の中に残されていたと伝えられています。

文責：史蹟史料部　両頭真衣